

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究

実施方法等

【類型 I】

1. 実践校について

実践校名	(かがわだいがくきょういくがくぶふぞくたかまつしょうがっこう) 香川大学教育学部附属高松小学校		
学科名	児童・生徒数	学級数	
	6 2 1 名	1 9 学級	

2. 実践研究の対象

【社会科】第3学年、第4学年で実施

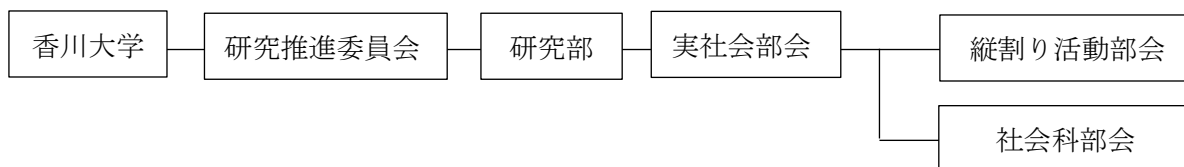
【「ちょうせん」の時間】1～6年生で組織された縦割り学級、計18学級（全校生）で取り組む。

3. 実践研究の実施経過

時期	実施内容
4 月	・社会科の実践授業の計画を立案し、1年間の研究の概要について整理 ・外部講師との事前検討会の計画についての立案 ・「ちょうせん」の時間のプロジェクト活動について、実社会とつながるプロジェクト活動の吟味 ・社会科授業に対する事前検討会（社会科部会での検討、研究部内での検討）や、外部講師との事前検討会の計画についての立案
6 月	・実践研究① 「ちょうせん」の時間 赤3組：「世界とつながるピース×ピースプロジェクト」 ・実践研究② 第4学年 社会科「水の循環 ～上水道と下水道～」 外部講師（筑波大学・人間系 唐木清志教授）
7 月	・先進校視察（国立大学法人 東京学芸大学附属竹早小学校）
10 月	・前期アンケート調査の実施
11 月	【実践校要請訪問】 ・実践研究③ 第3学年 社会科「ブロッコリー農家の仕事」 講師（文部科学省初等中等教育局 小倉勝登調査官）
12 月	・実践を踏まえての研究のまとめ（筑波大学・人間系 唐木清志教授との懇談） ・本校独自の年間計画モデル、主権者教育につながるプログラムのまとめ
1 月	・2年間の実践の成果と課題を発表する成果発表会への参加
2 月	・初等教育研究発表会での提案、発信 ・実践研究④ 第4学年 社会科「よみがえる桜御門～復元に込めた願い～」
3 月	・後期アンケート調査の実施

4. 実践研究の実施体制

(1) 研究組織



(2) 実施上の工夫点

① 縦割り活動コーディネーターの配置

円滑な運営のために、縦割り活動コーディネーターの教員を3名配置し、地域社会関係者との連絡調整等を行うようにした。

② 実社会プログラム部会の組織化

新たに実社会プログラム部会を組織した。定期的に社会科の学習プログラムについて意見交流を行うとともに、「ちょうせん」の時間との関連を図り、主権者として必要な資質・能力を効果的に育成できるよう工夫した。

③ 講師を招聘しての授業討議会の開催

1年に2回、講師を招聘しての授業討議会を行うようにし、授業実践をもとに、実社会とつながる学習プログラムの成果と課題を整理した。また、学識者からの指導・助言をもとに授業改善を行うなど、カリキュラムマネジメントを意識した取り組みを行った。

5. 教育委員会等として取り組んだ内容

香川大学は6学部を有しており、専門性の高い大学教員も多い。そのため、本校の「ちょうせん」の時間の実施にあたっては、大学教員の専門性を生かした小学校との共同プロジェクトを行うことで、より実社会に即したプロジェクトにすることができた。また、地域の企業や人材を積極的に活動に取り込むように努めた。さらに、地域・社会の発展に貢献することを目的に、学生が行う魅力的・独創的なプロジェクト事業（香大生の夢チャレンジプロジェクト等）とも連携を図り、共同して活動を展開することができた。

今年度は、赤4組「地域に愛される玉藻公園」の活動で、香川大学創造工学部と連携したプロジェクト、緑2組「外国の人に日本の文化を伝えよう」の活動で、香川大学インターナショナルオフィスとの一体型プロジェクト、赤2組「香川の伝統工芸」の活動で、学生プロジェクト「TERASU」との一体型プロジェクト等、様々な活動を附属高松小学校と共に行った。

また、第4学年社会科「水の循環～上水道と下水道～」では、香川大学瀬戸内圏研究センターの教員と連携し、下水処理場が行う季節別運転管理の取り組みが瀬戸内海の水質に与える影響等について捉えられるようにした。このように、大学教員との連携を図ることで、学習内容についてより実感を伴った理解を図れるようにした。

さらに、学習プログラムの有効性を検証するために、心理学を専門としている大学教員と小学校との連携を図り、活動が子どもに及ぼす影響について明らかにするなど、大学教員と小学校教員が連携をして活動の評価を行った。具体的には、今後の持続可能な社会の創り手を育成するために必要な資質・能力を見取るための心理尺度の測定方法に基づいた本校独自のアンケート調査を作成し、子ども・保護者・教師に調査を実施した。そして、調査結果を踏まえた上で、学習プログラムの改善や教師の支援の在り方について共同研究を行った。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

【類型Ⅰ】

実践校名：香川大学教育学部附属高松小学校**研究主題**

主権者として必要な資質・能力の育成を踏まえた「社会科」「ちょうせん」の時間の授業実践を通して、今後の持続可能な社会の創り手を目指すプログラム開発

主題設定の理由

本校は、児童数が 600 名を超える中規模校である。高松市の中心部に位置しており、高松市内すべてが校区であるため、バスや電車で通学する子どもも多い。そのため、放課後や休日等に学校の友達と一緒に遊ぶことが少ない。それに伴い、子ども会のような地域同士のつながりも希薄で、地域の大人と関わる機会も少ないなど、実社会とのつながりが不足している現状が見られる。

そのような状況を踏まえ、地域社会とつながることのよさを実感したり、実社会とのつながりの中で様々な体験を味わったりする時間を学校教育の中で保障することが大切だと捉えた。その時間の核となるのが「社会科」であり、それと有機的に関わると考えられるのが「ちょうせん」の時間である。これらの時間を通して、子どもたちは、自分の意見をもちつつ、異なる意見や対立する意見を整理して議論を交わしたり、他者の意見と折り合いを付けたりする中で、選択・判断を繰り返して合意形成を図っていきながら課題解決を行っていく。そのプロセスを通して、主権者として必要な資質・能力を育成することができると考えた。

社会科の時間では、「自ら参画しようとする意欲」「合意形成・意思決定する力」「多角的に考察し、公正に判断する力」「根拠をもって主張し、他者を説得する力」の 4 つの力を主権者として必要な資質・能力として置き、「主権者教育につながる教科学習の問題解決プロセス」を意識して実践を行っていく。1 年目の成果と課題を踏まえ、それぞれの資質・能力を問題解決プロセスのどの段階で育むのかを明確にして、授業実践を行う。

また、異学年集団による社会参画型プロジェクト活動「ちょうせん」の時間を教育課程に位置付け、「今後の持続可能な社会の創り手」になり得る子どもを育てていく。1 年間の継続的な社会参画型プロジェクト活動を行い、さらに社会科を核とした教科学習と関連させて取り組むことが、学びの深まりや実感を伴った理解につながると考えている。

さらには、主権者として必要な資質・能力を育む社会科カリキュラム構想案を本校版として作成し、社会科の授業実践と「ちょうせん」の時間のプロジェクト内容とのつながりを整理する。このカリキュラム構想案をもとに実践を行い、付加・修正を加えることにより、カリキュラム構想案を精緻化し、今後の主権者としての資質・能力の育成を踏まえた社会科の在り方についてまとめていく。

概要

小学校段階における主権者として必要な資質・能力の育成を目指した、社会科を核とした教科学習プログラムの開発

学習プログラムの主な内容

- ① 実社会の多様な関わりの場を保障し、その経験をもとに自分にできることを選択・判断する
【「ちょうせん」の時間】
高松市国際交流協会や、香川県ユニセフ協会とつながり、在留外国人との交流や、ユニセフ募金等の活動を通して、多文化共生社会の実現を目指すプロジェクト活動
- ② それぞれの資質・能力を養う場面を位置付けた学習プロセスを構想し、状況づくりのしかけを行う
【第4学年 社会科 21時間】
下水処理場が取り組む季節別運転管理の取り組みの在り方を選択・判断する活動を通して、公共事業が意図的・計画的に行われていることを理解する学習
- ③ 豊かな直接体験や地域の方との協同的な問題解決の場を設定する
【第3学年 社会科 10時間】
ブロッコリー農家が抱える課題を知り、学んだことをもとにしながら課題解決の方法について、農家の方と共に考えることを通して、農家の仕事と自分たちの生活との関わりを理解する学習
- ④ 主権者として必要な資質・能力を育む社会科カリキュラムを構想し、「ちょうせん」の時間との関連を図る
【第4学年 社会科 11時間】
「ちょうせん」の時間の経験を生かして、高松城の文化財継承の在り方を選択・判断する活動を通して、受け継がれてきた文化財には人々の願いが込められていることを理解する学習

学習プログラムの成果の概要

- ① 主権者として必要な資質・能力を設定し、それらを単元のどの場面で養うかを明確にしたことで、目指す子どもの姿がより具体的になった。また、問題解決過程を工夫し、学習内容をもとに選択・判断する場面をつくり出すことで、主権者として必要な資質・能力を育成することができた。
- ② 学習指導要領で、選択・判断することが求められていない内容においても、主権者として必要な資質・能力を育む問題解決プロセスの有効性を検証することができた。
- ③ 単元指導計画を作成し、社会科と「ちょうせん」の時間との関連を図りながら実践を行ったことで、相互の関連を図ることが主権者として必要な資質・能力に育成のために有効であることが、エピソード記録等の分析から確認できた。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（詳細）

【類型 I】

実践校名：香川大学教育学部附属高松小学校

学習活動① 実社会の多様な関わりを保障し、その経験をもとに自分にできることを選択・判断する

1 プロジェクト名

「世界とつながる！ピース×ピースプロジェクト」

赤3組 世界とつながる!! ピース×ピースプロジェクト

プロジェクトの概要：世界中の困っている人にあることを考え、実行するプロジェクト

子どもの夢や憧れ

- ・この広い世界には、どんな人が住んでいるの？いろいろな国や文化のことを知りたいな。（国際交流）
- ・ウクライナなど、世界中に困っている人がいるよ。わたしたちの力で、困っている人を助けたいな。

プロジェクトのゴール

地域の人や様々な文化をもつ人々と共に、世界中の困っている人を助け、よりよい社会に一歩でも近づけること。

地域の方の思い・願い

- ・子どもたちにも、多文化共生の大切さを理解してもらい、地域に広めたい。
- ・子どもたちのアイデアや行動力を生かして、募金活動やイベントを盛り上げて欲しい。

1人1人の個性が輝く姿

低学年
・日本語が苦手な外国人の方にも積極的に話しかけ、簡単な日本語で自分の思いや考えを伝える姿。
□募金の呼びかけ □学校の紹介 □うめフェスタでの絵本（国際理解）の読み聞かせ

中学年
・個人追究での経験や特長などを、募金活動や交流活動などで積極的に生かす姿。
□ひまわりの栽培 □英会話 □瓦町駅でのストリートピアノ演奏

高学年
・これまでの経験や教科学習での学びを総動員し、見通しをもってプロジェクトを進めたり、小グループのリーダーとして活動をリードしたりする姿。

多文化共生社会の実現

外国人住民を含む多様な人々の積極的な参画による地域活性化

・高松市に住む外国人の方の住みにくさを解決する。
案 防災面の支援

【岡田さん】 香川県ユニセフ協会
【今井さん・藤原さん】 ことほぎ地域開発本部
【山神さん】 香川県国際交流協会
【岡田さん・在留外国人】 高松市国際交流協会
【古川教授・学生】 香川大学国際交流協会
【短期留学生】 香川大学国際交流協会

**地域課題 多文化共生の意識啓発・意識醸成
日本人住民と外国人住民の交流の場づくり**

多様な「ひと・もの・こと」との出会い

活動Ⅰ 瓦町駅での街頭募金活動 【国際協力】
国際協力活動の一環として、ユニセフ募金活動を行う。香川県ユニセフ協会、ことほぎ地域開発本部と共同で開催する。また香川大学の短期留学生にも募金活動を手伝ってもらい、より多くの人に関心をもってもらい、1円でも多くの募金を集める方法を地域の人と試行錯誤する。

活動Ⅱ 香川県に住む外国人や外国人観光客との交流活動 【国際交流】
香川大学綾川まちづくりプロジェクト with による「世界の風作りプログラム」を通じて、香川県の技能実習生との交流を行う。また、かがわ国際フェスタ2022で活動の報告や、瀬戸芸での外国人観光客との交流を行う。

活動Ⅲ 香川県に住む外国人の方のためにできることを考えよう!! 【多文化共生】
これまで出会った香川県に住む外国人の人々のために、自分たちができることを考え、実行する。特に、防災の視点から多言語に対応した「みまもる」の開発、配布など、地域の方との協働的な社会参画を行っていく。

問題解決の過程での子どもの心に残る経験の保障

5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
活動Ⅰ 世界中の困っている人のために、地域の人と一緒に、募金活動しよう!! ・プロジェクトの決定 ・プロジェクトの方向性を話し合う ・募金活動に向けて植物（ひまわり）を育てよう。	・ユニセフについて知る 【香川県ユニセフ協会岡田さん】 ・香川大学短期留学生との交流会 ・募金活動に向けて、準備をしよう。	・1日縦割り活動 瓦町駅やサンポート高松で募金活動しよう!! ・集まった募金をユニセフ協会に寄付しよう。	・瀬戸内国際芸術祭への参加（希望者） ・夏休み国際交流イベントへの参加（希望者）	活動Ⅱ 香川県に住む外国人の方や外国人観光客と交流しよう!! ・香川県に住む技能実習生との交流体験をしよう 【技能実習生】 【香川大学まちづくりプロジェクト with】	・「かがわ国際フェスタ2022」で活動の発表や募金活動しよう。 ・小豆島での活動に向けて、国際交流員の方と準備をしよう。	・小豆島縦割り活動 ・瀬戸芸に集まっている外国人観光客の人に日本や香川のことを紹介しよう。 - うめフェスタ ・募金活動しよう	活動Ⅲ 香川県に住む外国人の方のためにできることを考えよう!! 1日創造活動 ・香川県に住む外国人の方にインタビューをしよう ・災害があったときの対処方法などをまとめた冊子をつくろう。	・国際交流員の方にアドバイスをもらいながら、外国語バージョンのみまもるを作成しよう。	・研究会発表会 ・募金活動しよう 3時間創造活動 ・多言語バージョンのみまもるを外国人の子どもたちにプレゼントしよう

2 活動の実践

本縦割り学級では、多文化共生社会の実現を目指してプロジェクト活動を進めていった。活動にあたり、2つの活動の軸を子どもたちと共有した。1つ目は、国際交流である。多様な国や地域の文化を知ったり、実際に外国の方との交流をしたりすることで、異文化の存在を知る。その過程で、香川県に住んでいる在留外国人の方、技能実習生との出会いを通じて、地域の多文化共生に関する課題に子どもたちが気付けるようにした。

2つ目は、ユニセフ募金活動である。世界中の子どもたちへの支援を行うユニセフの活動は、子どもたちにとっても切実感が高まり、自分ごととして捉えやすい国際貢献活動である。また、身近な地域の多文化共生につながる社会参画活動を、地域の多様な人たちとの協働的な学びから経験していくことができるようにした。

活動Ⅰ「世界中の困っている人のために、地域の人と一緒に、募金活動をしよう！」

募金活動を行う前に、ユニセフの活動の目的や世界の現状について知るために香川県ユニセフ協会の方にお越しいただき、ユニセフ学習に参加した。子どもたちは、アクティビティや映像資料を通じて、「水」「食料」「教育」等の多様な課題により、苦しみ困っている子どもたちがたくさんいることを驚きと共に実感していた。また実際の支援物資を見せてもらい、自分たちが集めた募金がどのような物に変わるのかを知ることができた。「自分たちにできることをしてあげたい」と課題意識を高め、活動への意欲の高まりが見られた。このようにして、地域や社会生活における具体的な課題等を自分との関わりの中で捉えられるよう工夫を行った。



参観日には、実際に募金活動を行った。保護者の方ということもあり、子どもたちの活動を肯定的に捉え、積極的に募金をしてくれる保護者の方が多かった。結果、合計で 10,840 円の募金を集めることができた。しかし、活動のふり返りでは、自信をもって呼びかけができなかったこと、保護者からの質問に関してうまく答えられなかったことなど、成果と課題が出され、次の活動へとつながっていった。



活動Ⅱ「香川県に住む外国人の方や、外国人観光客と交流しよう！」

香川県国際交流協会の方と連携し、子どもたちが香川県に住む外国人と交流できる場を設定した。交流を通して、子どもたちは様々な国の多様な文化を知ったり、互いの文化を大切にするということについて学んだりすることができた。そして、異文化共生社会の実現に向けて、世界の子どもたちの現状や、多様な異文化について発信したいという思いをもつようになった。そこで、香川県国際交流協会の方と一緒に、自分たちにできることは何かを話し合った。そして、香川国際フェスタ 2022 で、これまで学んできたことを発表し、集まった方々に募金をお願いするという計画を立てた。実際の発表では、多くの方に称賛の言葉をいただき、たくさんの募金が集まった。このように、自分たちが決めたことを実社会とのつながりの中で実行し、誰かの役に立ったという経験が、社会的な有用感を高め、ひいては社会に参画しようとする態度を育むことにつながると考えている。



活動Ⅲ「こまっている外国人の方のためにできることを考えよう！」

社会の中で成功経験をすることができた子どもたちは、県内に住む外国人のために、自分たちにできることをしたいという思いをもつようになった。そこで、香川県国際ボランティアセンターが、外国に学校を建設するプロジェクトを行っているという事実と出合わせた。そして、ボランティアセンターの方から実際に話を聞き、自分たちにもできそうなことを選択・判断した。子どもたちは、学校建設プロジェクトの手伝いとして募金活動を行ったり、売り上げがその事業に寄付されるチャリティーショップの手伝いをしたりと、自分たちで決めたことを実行していった。その過程で、大人からの肯定的なフィードバックやアドバイスがあったことで、「自分たちのしたことは、〇〇の役に立つんだな」「こんなに喜んでくれるなんて、嬉しいな」と実感することができた。1年間のプロジェクト活動を通じて、多様な関わりをもちながら、自分たちが選択・判断したことを実行してきたからこそ、社会に参画しようとする態度を育むことができたと考えている。

学習活動②それぞれの資質・能力を養う場面を位置付けた学習プロセスを構想し、状況づくりのしかけを行う

1 単元名

第4学年 社会科 「水の循環～上水道と下水道～」

2 目標

- 飲料水は、様々な機関の人が連携し、24 時間いつでも安全で安定的かつ計画的に供給されており、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解する。
- 季節別運転管理の取り組みの在り方について、自分なりの根拠をもって説明する。

3 関係諸団体との連携について

本単元では、浄水場、下水処理場、水資源機構、香川大学瀬戸内圏研究センター等、様々な施設の方と連携し、学習を進めた。下水処理場の人の話から季節別運転管理の取り組みを知り、様々な考えをもとにして、今後の下水処理場の在り方を考えられるようにした。（詳細は次頁に記載）

4 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
上水道や下水道事業について、調査したり流れ図などにまとめたりすることを通して、これらの事業は安全かつ安定的に行われるよう計画的に進められていることや、人々の生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。	上水道と下水道事業について、時間的、空間的、関係的な見方で捉え、関係機関の相互の関連や、従事する人々の働きについて比較、関連付け、総合して考えている。	人々の健康や生活環境を支える事業について、問いを見出し、主体的に問題解決しようとしたり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。

5 単元構成（全 21 時間）

段 階	時	学 習 活 動
I 「学習問題 の設定、学 習への見通 し」	① ② ③	○水がどこからきて、どこへいくのかについて話し合い、本単元の学習問題、学習課題を設定する。 ・学校内を探検し、水の流れについて話し合う。 ・水がどこからきて、どこへいくのかについて、学習問題を立て、学習の計画を話し合う。 【学習問題】 水は、どのように送られてきて、使った後はどうなるのだろう。
II 「現状の理 解、問題点 の把握」	④ ⑬	○水のゆくえについて調べ、分かったことを流れ図にまとめる。 ・浄水場の見学を行い、水がきれいになる仕組みや、蛇口までの道筋を流れ図にまとめる。 ・香川用水の仕組みを調べ、早明浦ダムから香川用水を通してやってくる水の流れを流れ図に付け加える。 ・下水処理場を見学し、下水処理の仕組みを調べる。
III 「深まった 課題の設 定」	⑭	○下水処理場の方から聞いた季節別運転管理の取り組みについて調べ、深まった課題をつくる。 【深まった課題】 水をきれいにするはずの下水処理場が、完全にきれいにしていない水を海に流しているのはなぜだろう？
IV 「多角的に 考察、選択・ 判断」	⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ (本時)	○様々な立場の方の話を聞き、それらをもとに下水処理場がこれから大切にしていけるべきことを話し合う。 ・海苔の色落ちの現状について、漁場者の方に話を聞く。 ・季節別運転管理のねらいや、様々な考え方について、香川大学の先生から話を聞く。 ・季節別運転管理をどのように行っていけばよいかについて、自分の考えをもつ。 ・様々な立場の考えをもとに、下水処理場がこれから大切にしていけるべきことについて話し合う。
V 「自分なり の最適解の 表出」	⑳ ㉑	○学んだことをもとに、これからの自分にできることを選択・判断する。

6 問題解決のプロセスと指導上の留意点

(1) 学習問題の設定、活動の見通し

単元はじめには、校内の水道調べ等を通して、単元の課題を設定した。ここでは、水が出るところだけでなく、排水口などの水が流れていくところにも着目できるようにすることで、「水は、どのように送られてきて、使った後はどこへいくのだろう。」という課題をもてるようにした。調べを通して水が循環していることを捉えやすくしたことで、人々の健康や生活環境を支える事業についてより深く理解することができた。



(2) 現状の理解

多くの関係機関と連携、協同することで、学習内容について実感を伴って理解できるようにした。例えば、浄水場や下水処理場の見学、水資源機構の出前授業、香川用水記念館の見学等である。実際



に足を運び、専門家に話を伺うことを大切にしました。ここでの学びが、後に選択・判断する際の根拠となり、資質・能力の育成にも大きく関わると考えている。

(3) 深まった課題の設定

調べが進んだ段階で、「下水処理場が、ある季節だけ完全にきれいではない水を海に放流している」という事実に出合った。すると、子どもたちに意識のずれが生まれ、「水をきれいにするはずの下水処理場が、なぜそんなことをするのだろう」という深まった課題が出てきた。このように、子どもたち自身が深まった課題を設定できるようにし、社会に見られる課題に対して自分の考えを選択・判断する状況をつくることを大切にしました。

(4) 多角的に考察、構想、選択・判断する

ここでは、下水処理場の方、県漁連の方、香川大学瀬戸内圏研究センターの方、保護者（市民）という4つの立場の人に話を聞き、そこで聞いたことをもとに、下水処理場が行う季節別運転管理の今後の在り方について話し合った。子どもたちは、これまでの学びを根拠にして考えを伝えたり、いくつかの考えを比較し、どちらがよいかを説明したりすることができていた。また、様々な考えを比較しながら自分の考えをもつ姿や、友達の考えを聞いて、柔軟に取り入れる姿も見られた。このような姿は、根拠をもって主張し、他者を説得する力や、多角的に考察し、公正に判断する力が育まれた姿だと捉えている。



(5) 自分なりの最適解の表出

集団としての意思決定を踏まえた上で、最終的な自分の最適解をもつようにした。子どもたちは、友達の考えを聞いた上で、自分の考えを強固にしたり、変容させたりしており、友達の考えに納得している児童も多く見られた。このように、様々な考えを踏まえた上で最終的に自分の考えをもつということは、主権者として大切にしたいことだと考えている。

学習活動③ 豊かな直接体験や地域の方との協同的な問題解決の場を設定する

1 単元名

第3学年 社会科 「ブロッコリー農家の仕事」

2 目標

- 農家の仕事は、地域の人々の生活と密接な関わりをもって行われていることを理解する。
- 農家の仕事に見られる課題について、自分の考えをもち、その根拠を農家の人や友達に説明する。

3 関係諸団体との連携について

本単元では、まるまる農園という農家の方と連携し、学習を進めた。農家の見学を行ったり、農家さんの悩みをきっかけに深まった課題を設定したり、悩みの解決策を協同して考えたりと、単元を通じて農家と関わった。そうすることで、子どもたちが農家の抱える課題を自分ごととして捉え、自分なりの考えをもつことができた。

4 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
農家の仕事について、見学したりお仕事をカレンダーなどにまとめたりすることを通して、農家の仕事は地域の人々の生活と密接な関わりをもって行われていることを理解している。	農家の仕事について、時間的、空間的、関係的な見方で仕事の様子を捉え、地域の人々の生活との関連や、従事する人々の働きについて比較、関連付け、総合して考えている。	農家の仕事について、問いを見出し、主体的に問題解決しようとしたり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。

5 単元構成（全 11 時間）

段 階	時	学 習 活 動
I 「学習問題の設定、学習への見通し」	① ② ③	○ ブロッコリー農家の仕事について調べる単元の学習問題と計画を設定する。 ・高松市でたくさん作られている農産物について調べ、香川県ของブロッコリー生産量が全国で3位であることを知る。 ・高松産のブロッコリーの試食やブロッコリーの栽培活動を通して考えた調べたいことや疑問について話し合う。 ・高松市のブロッコリー農家について調べる学習問題をつくる。 【学習問題】 農家の人は、おいしいブロッコリーをたくさんつくるために、どのような工夫をしているのだろう。
II 「現状の理解、問題点の把握」	④ ⑤ ⑥ ⑦	○ ブロッコリー農家大東さんのまるまる農場を見学し、ブロッコリーの育て方をカレンダーにまとめる。 ・まるまる農園を見学し、ブロッコリー栽培の方法を調べる。 ・調べたことをカレンダーにまとめる。 ・ブロッコリーづくりの工夫を見つけ、工夫カードにまとめる。 ・ブロッコリーづくりの工夫をカレンダーに貼る。
III 「深まった課題の設定」	⑧	○ 大東さんの悩みを知り、深まった課題を設定する。 ・気候や自然災害によって収穫が不安定なときがあること、他地域の生産量が増え、価格が下がっていること、そして大東さん自身もこれから農家としてつづけていくために悩んでいることを知る。 【深まった課題】 大東さんが、農家を続けていくためには、どうすればいいのだろう？ まるまる農園の未来をみんなで考えよう。
IV 「多角的に考察、選択・判断」	⑨ ⑩ (本時)	○ これからのまるまる農園の在り方を考え、地域の人と共に議論する。 ・他県の生産量が増えていることを知り、どうすればこれからも農家として続けられるか考えたり、調べたりして自分の考えをもつ。 ・これからのまるまる農園の在り方を、地域の人と共に話し合う。 ブロッコリーから他の作物への転換 ブロッコリーの品質の向上 販路の拡大など
V 「自分なりの最適解の表出」	⑪	○ブロッコリーの学習を通して分かったこと、考えたことをまとめるとともに、これからの農家さんにとって大切なことは何か考え、大東さんに提案する。

6 問題解決のプロセスと指導上の留意点

(1) 学習問題の設定、活動の見通し

まず、香川県でブロッコリーがつけられていることを知り、ブロッコリーの試食を行った。さらに、香川県のブロッコリー生産が全国3位であるという事実を知らせることで、子どもたちは香川県のブロッコリー生産に関心をもち、「農家さんはどのようにたくさんのおいしいブロッコリーをつくられているのだろうか」という学習問題を設定した。そして、学習問題の予想を交流し、学習の計画を立てることで、単元の見通しをもつことができるようにした。



(2) 現状の理解

次に、ブロッコリー農家さんと出会い、農家の見学をしたり、市役所の方の話を聞いたりして、ブロッコリーづくりの工夫を調べ、農家のお仕事カレンダーにまとめていった。ここでは、学級園で自分たちでもブロッコリーを育てることで、農家さんの工夫や苦勞を、実感を伴って理解することができた。このように、学習過程に直接体験を工夫して取り入れることで、学習内容を深く理解することにつながり、ひいてはそれが単元後半で選択・判断する際の根拠になっていく。



(3) 深まった課題の設定

その後、調べたことを伝えるという文脈で、農家さんとの交流会を行った。そこで、ブロッコリー農家が抱える切実な課題を伝えてもらうことで、子どもたちと共に深まった課題を設定した。農家さんの悩みを一緒に考えたいと思う状況をつくり出すことで、3年生なりに、地域の課題に対して、自分の考えをもてるようにした。

(4) 多角的に考察、構想、選択・判断する

農家を続けていくためのアイデアを一人一人がもち、根拠をもって意見を語った。農家さんの考えを聞きながら、全体での吟味を通してよりよいアイデアに修正していった。考えを吟味する場面では、それぞれのアイデアのメリットやデメリット、実現可能性、コストなどが視点として出され、農家の仕事を様々な面から考察することができた。



(5) 自分なりの最適解の表出

ここでは、農家さんの抱える課題について、自分の最終的な考えを決め、意見書に書いた。多様な意見を自分なりに受け入れ、よりよい提案になるように修正する姿が見られ、主権者として必要な資質・能力の伸びが感じられた。

冬によくしゃかできる作物を育て、売る	
提案すること	文房やイラストでもOK
提案する理由	私が上のようなことを提案する理由は、大東さんはこの前、Zoomでつながった時、なやみがあると言いました。うちの内の1つが、冬が寒すぎるといいます。なので、冬に育つ作物を育て、その時に売ればいいのでは？と私は思いました。それでは、おすすめします。

冬寒すぎ!!

でも冬によくしゃかできる作物は?

うすのひんは...

ただ、冬に水やりも必要なのでは?と、私は思いました。

学習活動④ 主権者として必要な資質・能力を育む社会科カリキュラムを構想し、「ちょうせん」の時間との関連を図る

1 単元名 第4学年 社会科 「よみがえる桜御門～復元に込めた願い～」

2 目標

- 調べたことを年表などにまとめることを通して、県内の文化財は地域の人々が受け継いできたことや、それらには人々の願いが込められていることを理解する。
- 高松城の天守をどのような形で未来に受け継いでいくかについて、自分なりの根拠をもって話し合い、文化財継承の意味を捉える。

3 関係諸団体との連携について

本単元では、玉藻公園管理事務所、高松市埋蔵文化財センター、NPO 法人高松城の復元を進める市民の会と連携して学習を進めた。これらの方は、「ちょうせん」の時間「玉藻公園をPRしよう」の時間にも連携し、追究を進めている方々である。

4 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
県内の伝統や文化について、高松城を見学したり年表などにまとめたりすることを通して、県内の文化財や年中行事は、地域の人々が受け継いできたことや、願いが込められていることを理解している。	県内の伝統や文化について、時間的、空間的、関係的な見方で文化財や伝統行事の様子を捉え、人々の願いや努力について、比較、関連付け、総合して考えている。	県内の伝統や文化について、問いを見出し、主体的に問題解決しようとしていたり、学習したことを社会生活に生かそうとしていたりしている。

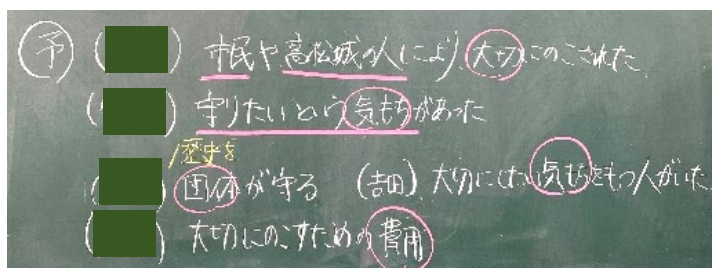
5 単元構成（全 11 時間）

段 階	時	学 習 活 動
I 「学習問題の設定、学習への見通し」	① ②	○香川県の文化財や年中行事について話し合い、本単元の学習問題、学習課題を設定する。 ・香川県の文化財や年中行事について調べ、地図で分布を確認する。 ・身近な文化財として高松城に着目し、学習問題を立て、学習の計画を話し合う。 【学習問題】 文化財として残る高松城は、どのようにして今に受け継がれてきたのだろう。高松城の移り変わりを調べて、そのひみつを見付けよう。
II 「現状の理解、問題点の把握」	③ ④ ⑤	○高松城の移り変わりについて調べ、文化財保護のための人々の工夫や努力、願いを考える。 ・高松城のこれまでの歴史や取り組みについて調べ、年表にまとめる。 ・披雲閣や桜御門を見学したり、市の文化財課の人に話を聞いたりして、文化財保存事業の様子を捉え、人々の努力や願いについて考える。 ・動画や文化財課の人の話から桜御門復元の様子を詳しく調べ、込められた人々の願いや、文化財を継承することの意味について考える。
III 「深まった課題の設定」	⑥	○天守復元の現状について知り、深まった課題をつくる。 【深まった課題】 高松城をこれからも受け継いでいくためには、高松城で話題となっている天守復元を、どのように考えたらよいのだろう。
IV 「多角的に考察、選択・判断」	⑦ ⑧ ⑨ ⑩ (本時)	○天守復元について様々な立場の方の話を聞き、文化財としての高松城をこれから先も受け継いでいくために大切なことを話し合う。 ・天守復元や、天守の復元に向けた取り組みについて、市の文化財課の人に話を聞く。 ・天守復元について、玉藻公園管理事務所の所長さんに話を聞く。 ・天守復元について、市民団体の方に話を聞く。 ・様々な人の話や、高松城の移り変わり、これからの計画などをもとに、高松城を受け継いでいくために大切なことについて話し合う。
V 「自分なりの最適解の表出」	⑪	○話し合ったことをもとに、最終的な自分の考えを意見書に書く。

6 問題解決のプロセスと指導上の留意点

(1) 学習問題の設定、活動の見通し

まず、県内の文化財や年中行事を調べ、白地図に整理した。その後、自分たちの住む高松市に目を向けて調べていった。すると、高松城には1箇所でも7つもの重要文化財があるという事実に出会った。これらの中には子どもたちが知っているものもあり、いつから残されているかが気になって調べていった。そして、300年以上残されているものがあることを確認し、学習問題へとつないでいった。学習問題について予想し、そこから単元の計画を立てることで、学習の見通しをもって追究を進めることができた。



(2) 現状の理解

高松市埋蔵文化財センターの方に案内をいただきながら、高松城跡を見学した。見学をしたのは、月見櫓（工事中）、渡櫓、披雲閣、桜御門、艮櫓である。事前に見学の意図と話をしてほしいポイントをお伝えしておいたため、文化財を古くから残すための人々の努力や、その背景にある願いまで、丁寧にお話をいただくことができた。このように、学習内容やその後の選択・判断の姿まで緻密に想定した上で、知識を獲得できるように活動を進めることが大切である。



(3) 深まった課題の設定

子どもたちは、「文化財は昔の人の思いを大切にし、できるだけ変わらない姿で残すことが大切である」ことを学んできた。そこで、内部が不明確なまま天守復元を進めているという、学んできたことと異なる事実と出合えるようにした。そうすることで子どもたちに問いが生まれ、「高松城を未来に受け継ぐ上で、天守の復元をどう考えたらよいのだろう」という深まった課題を、子どもたちと共有した。

(4) 多角的に考察、構想、選択・判断する

玉藻公園管理事務所の方、高松市埋蔵文化財センターの方、NPO法人高松城の復元を進める市民の会の方、保護者（市民）という4つの立場の方に、天守復元について意見を聞いた。その上で、高松城を未来に受け継ぐ上で、天守復元をどう考えるべきかについて、「完全復元」「内部は不明確だが復元」「復元しない」の3つから選択・判断し、その根拠を話し合っていた。この時、「ちょうせん」の時間のプロジェクト活動で経験したことを根拠として述べる児童も多くいた。「ちょうせん」の時間と内容の関連を図ったことで、地域の課題について自分の考えを選択・判断する過程でその経験を生かして考える姿が多く見られた。



(5) 自分なりの最適解の表出

友達と話し合ったことをもとに、最終的な自分の解を意見文に書いた。友達の意見に納得し、最初の自分の考えから変容している児童も多くいた。

成 果

(児童の変容等)

- 本実践では、社会参画意識や社会形成に参画する態度を見据えた評価項目について、本校教員と香川大学教員が連携して、社会参画に関わる5つの側面（下記参照）を踏まえた評価項目を作成し、アンケートを行うことで単元前後の変容を見取るようにした。下に示しているのは、第4学年社会科「水の循環」際に行ったアンケート項目と、変容のデータである。

アンケート項目

- ①地域や社会のできごとに、きょうみや関心がある。
- ②学校外の人とのかかわりは、自分の学びのやくにたっていると思う。
- ③どうすれば地域や社会をよりよくできるかについて、考えている。
- ④わたしが考えていることが、地域や社会のやくにたつことがあると思う。
- ⑤地域や社会をよりよくするために、自分もなにかをしたいと思っている。

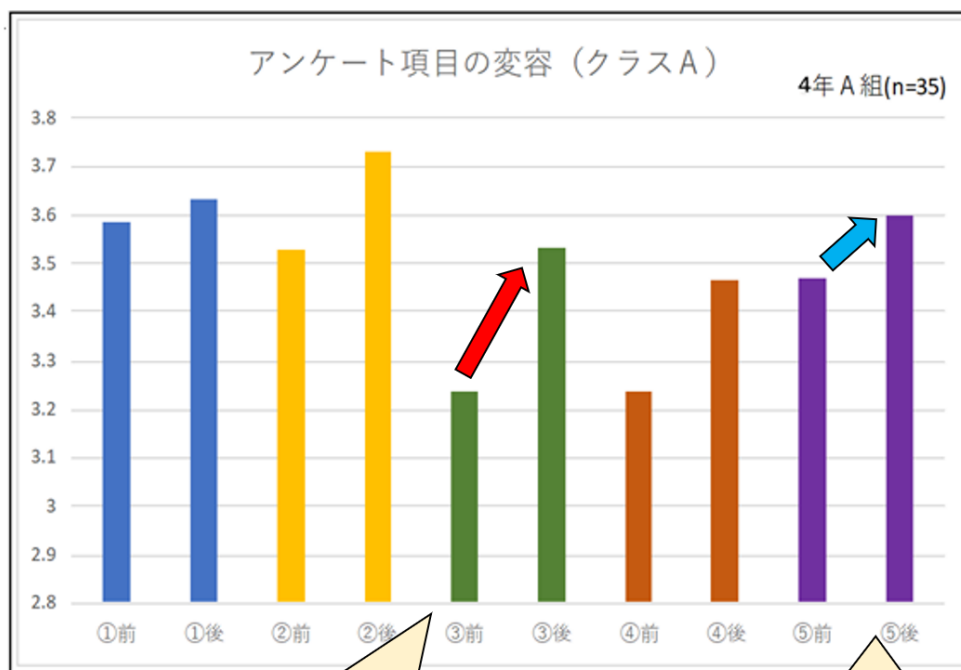
①社会への興味・関心

②実社会と関わる必要感

③よりよい社会づくりへの意欲

④学びの有用感

⑤社会参画への意欲



③よりよい社会
づくりへの意欲

⑤社会参画への
意欲

アンケート結果が示すように、5つの側面については、どの項目も単元の前後で数値の上昇が見られた。特に、「③よりよい社会づくりへの意欲」の項目の伸びが大きかった。これは、地域に見られる課題に対して、自分の考えを選択・判断し、議論する場を設定したことの成果だと捉えている。また、「ちょうせん」の時間との関連を図り、より実社会とつながった中での選択・判断ができる状況づくりを行ったことで、自分ごととして地域の課題を捉えることができたり、その子なりのこだわりや実感をもって意見を述べることにつながったりしたと考えている。

さらに、子どもたちはふり返りの中で、「実社会とつながりながら、大人と協同して問題解決することのよさ」「様々な立場の人の意見を聞くことの大切さ」について言及しており、学習プログラムを行ったことによる変容が見て取れる。（下記参照）

ふり返り①

ぼくは、はじめブロッコリー農家さんはすごい工夫をしていて、なやみなんてないと思っていたけど、お話を聞いて、大変なこともあるんだと気付きました。だから、農家の〇〇さんと話し合いながら、どうすれば農家を続けられるかを一生けんめい考えました。農家さんと話し合ったり、友達と話し合ったりしたから、自分が考えていたことが、さらにいい考えになったと思いました。農家さんも、ぼくの考えをほめてくれました。いっしょに考えてきて、よかったと思いました。

（第3学年社会科の実践より）

ふり返り②

高松城の復元のことを聞いたとき、わたしは「内部の様子が分からないのに、復元してもいいのかな」と思いました。でも、いろいろな大人に話を聞いてみると、ほとんどの人は復元した方がいいという考えでした。理由も人によってちがっていました。わたしは、高松市埋蔵文化財センターの〇〇さんの話を聞いて、復元した方がいいと思うようになりました。理由は、まちのシンボルになるし、多くの人に歴史を知ってもらうことができるからです。いろいろな考えを知れて、自分の考えが変わりました。

（第4学年社会科の実践より）

ふり返り③

わたしは天守復元には反対です。いろいろな人の話を聞いたけど、やっぱりそう思いました。なぜなら、天守台からの景色をこわしたくないからです。わたしが「ちょうせん」の時間で天守台に行った時、そこにいたお客さんにインタビューしました。そしたらその人は、「天守台から見るこの景色が好きだから来た」と言っていました。わたしも、天守台から見える瀬戸内海の景色が好きです。だから、天守復元もいいと思うけど、わたしは復元しない方が、そういう人の思いを大切にすることになると思いました。

（「ちょうせん」の時間で玉藻公園 PR を行った4年生の社会科でのふり返り）

- 本校では、社会科を軸としながら「ちょうせん」の時間との関連を図り、主権者として必要な資質・能力の育成を目指してきた。その中で、「ちょうせん」の時間との関連を図ったからこそ、社会科での学びをより効果的に行うことができたという教師の声が多く聞かれた。以下に、その一部を示す。

エピソード① 3年生「社会科」(内容の関連)

「高松市のようす」の単元で、市内に古くから残る建造物について問いかけた際に、赤2組の子どもたちが玉藻公園(高松城跡)について説明してくれた。「玉藻城は全国でも珍しい水城であること」「堀の中には海水が引き入れられ、鯛が泳いでいること」など、「ちょうせん」の時間で学んだことや実際に見学して自分たちが見つけた玉藻公園の魅力を他の子どもたちに伝えることができていた。また、Googleマップやネットの画像検索を活用して、玉藻公園の様子を説明することもできた。

エピソード② 3年生「社会科」(方法の関連)

赤3組のプロジェクト、「世界とつながる！ピース×ピースプロジェクト」において、パワーポイントを用いた世界のクイズづくりを行った。その経験を生かし、3年「農家の仕事」の学習では、パワーポイントを駆使して農家さんをPRするポスターを作成した。

縦割り学級で、高学年の子どもたちに作り方を教えてもらったようで、社会科の時間では、自分たちの力で作ることができていた。

エピソード③ 5年生「社会科」(内容の関連)

令和3年度に赤5組が行った「ドコモ こども つながる幸せプロジェクト」で活動した子どもたちは、社会科「情報」の単元において、インターネットでの情報の出所を明らかにしようとするなど、情報モラルへの意識を高くもって活動が行えていた。また、NTTドコモを見学した際に、教えていただいた農業を支えるIoTや遠隔操作ができるシステムなど、学んだことが頭に残っているようで情報社会の発展が産業の発展につながっていることを授業の中で主張する姿が見られた。

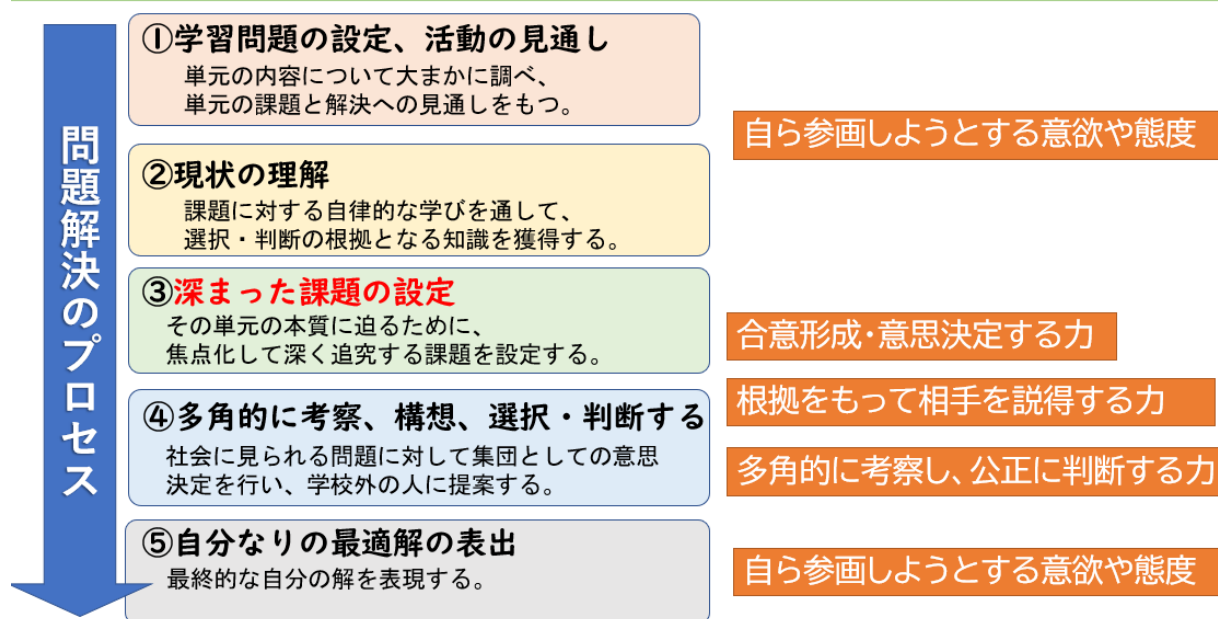
エピソード④ 4年生「社会科」(内容の関連)

社会科で「特色ある地域とわたしたちの暮らし」の単元を学習するにあたって、金丸座(琴平町にある全国最古の芝居小屋)を取り上げた。金丸座にどのような歴史があるのかを年表等で調べていると、赤4組の子が、「金丸座と、玉藻公園(高松城跡)の披雲閣(高松城の御殿)は似ている」と発言した。「どうして？」と尋ねると、「披雲閣も耐震工事をしたとガイドさんが言っていた。金丸座も耐震工事をしたと校外学習の時に聞いた。どちらも工事のあとがあまり目立たないようにしていた。」と、発言した。教師は、「琴平町の人、披雲閣と同じように金丸座を守り伝えようとしているんだね」と、返した。社会科で学ぶ文化財保護に関わる人々の取り組みについて、「ちょうせん」の時間での体験を通してより実感を伴って理解できた瞬間であった。

(取組の工夫)

- 主権者として必要な資質・能力を育むために、本校では小学校における4年間の社会科カリキュラムを、3つの内容のまとまりに整理した。このように整理することで、単元の学びの連続性や接続を意識することができ、3年生からの4年間を通して資質・能力を育むことができると考えた。また、社会科と「ちょうせん」の時間との関連を意識できるように、指導計画を作成した。相互の内容の関連を意識しながら実践を行うことで、資質・能力の育成を図ってきた。(別紙①参照)
- 小学校段階において、主権者として必要な資質・能力を育成するためには、「地域に見られる課題を把握し、一人一人が自分なりの考えをもって多様な考えを聞いて整理したり、他者の意見と折り合いを付けたりする中で、選択・判断を繰り返して合意形成を図っていくプロセス」が大切だと捉えている。そこで本校では、社会科と「ちょうせん」の時間において、下のような5段階の学習プロセスで問題解決を進められるように工夫した。また、本校が設定した主権者として必要な資質・能力を、単元のどの段階で育むのかを明確に位置付けることで、目指す子どもの姿が具体的にになり、教師の指導がより意図的・計画的なものになった。

問題解決のプロセスの各段階において育みたい力



さらに、この5段階の問題解決のプロセスについて、学習指導要領で選択・判断することが求められていない内容についても主権者として必要な資質・能力を育成することができるよう、単元計画を作成し、実践を行った。

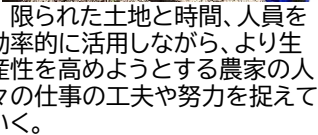
- 香川大学との連携を積極的に行った。大学教員の専門性を生かした共同プロジェクト、大学生との共同プロジェクトなど、香川大学との一体型プロジェクトを行うことで、より実社会に即した専門性の高いプロジェクトになるようにした。さらに、専門性の高い学生や、地域の企業や人材を積極的に紹介してもらうことで、社会科授業や、「ちょうせん」の時間のプロジェクト活動の活性化を図った。

主権者としての資質・能力を育む社会科カリキュラム全体構想案

目標	学校	学び続ける力・関わる力・創造する力		
	教科	学びに向かう力、人間性等 思考力、判断力、表現力等 知識及び技能		
	主権者	自ら参画しようとする意欲や態度 合意形成・意思決定する力 多面的・多角的に考察し、公正に判断する力 根拠をもって主張し、他者を説得する力		
		内容Ⅰ くらしと国土・産業	内容Ⅱ くらしと政治・文化	内容Ⅲ くらしと健康・安全
第3学年		わたしのまち みんなのまち ■学校のまわり ■高松市のようす はたらく人とわたしたちのくらし ■農家の仕事／工場の仕事 ■店ではたらく人	高松市と人々のくらしのうつりかわり	くらしを守る ■火事からくらしを守る ■事故や事件からくらしを守る
第4学年		わたしたちの県 ■日本地図を広げて ■香川県の広がり 特色ある地域と人々のくらし ■国際交流が盛んな直島町 ■うちわをつくるまち・丸亀 ■自然を生かしたまちづくり三豊市	↓ きょう土の伝統・文化と先人たち ■残したいもの 伝えたいもの ■ふるさととの発展につくした人	↓ 住みよいくらしをつくる ■水はどこから ■ごみのしよりと利用
第5学年		わたしたちの国土 ■世界の中の国土 ■国土の地形の特色 ■低い土地のくらし／高い土地のくらし ■国土の気候の特色 ■あたたかい土地のくらし／寒い土地のくらし わたしたちの生活と食料生産 ■くらしを支える食料生産 ■米づくりのさかんな地域 ■水産業の盛んな地域 ■これからの食料生産とわたしたち わたしたちの生活と工業生産 ■くらしを支える工業生産 ■自動車をつくる工業 ■工業生産を支える輸送と貿 ■これからの工業生産とわたしたち 情報化した社会と産業の発展 ■情報産業とわたしたちのくらし ■情報を生かす産業 ■情報を生かすわたしたち わたしたちの生活と環境 ■わたしたちの生活と森林	↓ わたしたちの生活と政治 ■わたしたちのくらしと日本国憲法 ■国の政治のしくみと選挙 日本の歴史 ↓ 世界の中の日本 ■世界の未来と日本の役割	↓ わたしたちの生活と環境 ■自然災害を防ぐ ■環境を守るわたしたち ↓ わたしたちの生活と政治 ■子育て支援の願いを実現する政治／ 震災復興の願いを実現する政治
第6学年		↓ 世界の中の日本 ■日本とつながりの深い国々 ↓	↓ 世界の中の日本 ■世界の未来と日本の役割	↓ 世界の中の日本 ■世界の未来と日本の役割
中学校社会科へつなぐ				

□内容Ⅰ「くらしと国土・産業」…「持続可能な社会」の創り手を育てるために

～くらし(経済)の中で、国土環境(自然環境・社会環境)保全、資源の活用を図る人づくり～

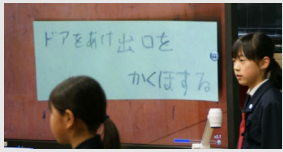
	社会科 くらしと国土	主権者としての資質・能力へつなぐ	縦割り活動とのつながり
第3学年	わたしのまち みんなのまち ■学校のまわり ■高松市のように はたらく人とわたしたちのくらし ■農家の仕事／工場の仕事 ■店ではたらく人	■わたしたちのまちと高松市 高松市について人口、交通、地形、土地利用、古くから残る建物の視点で調べたことをもとに、高松市のよさが伝わるサイクリングコースを構想し発信する。(R1実践) ■農家のしごと 作物の価格の低下や自然災害等による不安定さなど、高松市の農家が抱える課題を捉え、これからの農家の在り方を選択・判断しながら自分なりの考えをもつ。(R2実践) 	●白3組 空き家ミッション 高松市の空き家問題解決プロジェクト ●赤4組 きらきらカレンダー 魅力を発信するカレンダーで地域を盛り上げるプロジェクト ●お店・農家さん・お客さんを つなぐ野菜で笑顔プロジェクト 八百屋さんに協力してもらい、野菜を売るために自分たちができることを考え、挑戦していきます。まずは、実際に野菜を食べて、その美味しさを POP でお客さんに伝えます。 
第4学年	わたしたちの県 ■日本地図を広げて ■香川県の広がり 特色ある地域と人々のくらし ■国際交流が盛んな直島町 ■うちをつくるまち・丸亀 ■自然を生かしたまちづくり三豊市	 限られた土地と時間、人員を効率的に活用しながら、より生産性を高めようとする農家の人々の仕事の工夫や努力を捉えていく。 ■香川県の特色あるまちづくり 県内の特色ある地域のまちづくりのようすを捉え、移住希望者に伝える地域の魅力を選択・判断し、ランキング等に表現し実際に提案する。(R2実践)	 実際に県内の農家さんを訪れ、農家さんの思いや工夫を知り、活動に生かします。
第5学年	わたしたちの国土 ■世界の中の国土 ■国土の地形の特色 ■低い・高い土地のくらし ■国土の気候の特色 ■あたたかい土地のくらし／寒い土地のくらし わたしたちの生活と食料生産 ■くらしを支える食料生産 ■米づくりのさかんな地域 ■水産業の盛んな地域 ■これからの食料生産とわたしたち わたしたちの生活と工業生産 ■くらしを支える工業生産 ■自動車をつくる工業 ■工業生産を支える輸送と貿易 ■これからの工業生産とわたしたち 情報化した社会と産業の発展 ■情報産業とわたしたちのくらし ■情報を生かす産業 ■情報を生かすわたしたち わたしたちの生活と環境 ■わたしたちの生活と森林	■わたしたちの生活と食料生産 食糧自給率の低下や農業に関わる人の減少など、食料生産が抱える課題を解決するための方法を考え、その中から大切だと思うものを選択・判断し、ランキングに表現する。 ■情報化した社会と産業の発展 情報化社会のよさや課題を捉え、よりよい社会や産業の発展に向けた情報活用の在り方を考えたり、情報と自分との関わり方を選択・判断したりする。  新聞・広告を軸に、多様なメディアの長所と短所を捉え、そして情報と自分たちとの関わりを選択・	●白4組 残飯ゼロプロジェクト 「残飯を減らすために何ができるか？」一人一人が課題意識をもち、毎日の残飯の計量や廃棄も含め、日々活動しています。食品ロス削減の輪を広げます。  ユニセフ協会や琴電の協力のもとユニセフ街頭募金や国際交流イベントへ参加します。
第6学年	世界の中の日本 ■日本とつながりの深い国々 世界の中の日本 ■世界の未来と日本の役割	■未来へ向かうコロナ時代の国際協力(R4実践) 青年海外協力隊の方との交流を通して、日本が担うべき国際協力の在り方について選択・判断するとともに、今後、国際社会で日本人として必要な力・考え方を構想することができる。	●赤3組 世界とつながる！！ ピース×ピースプロジェクト 国際交流活動を通じて、異文化の存在を知り、自分たちにできることを考え、実行していくプロジェクト。

中学校社会科へつなぐ

□内容Ⅱ 「くらしと政治・文化」…私たちの「伝統・文化」を守り、受け継ぐために
 ～国際社会、国家、地域社会の一員としての自覚と責任をもち、行動できる人づくり～

	社会科 くらしと政治・文化	主権者としての資質・能力へつなぐ	縦割り活動とのつながり
第3学年	高松市と人々のくらしのうつりかわり	 高松市の移り変わりや高松市が抱える課題を捉え、今後の市の在り方について構想する。 ■ 高松市のうつりかわり(R4実践) 高松市の移り変わりや市が抱える課題について、多様な視点から捉え、今後の高松市のよりよい在り方について構想する。	 中心市街地の人口減少による空き家問題に対して、自分たちができることを考えます。 ● 白3組 空き家ミッション 高松市の空き家問題解決プロジェクト
第4学年	きょう土の伝統・文化と先人たち ■ 残したいもの 伝えたいもの ■ ふるさとの発展につくした人	■ 蘇る！玉藻城の桜御門(R4実践) 玉藻城の桜御門の復元事業に関わる多様な人々の取り組みや思いや願いを捉え、これからの玉藻城の在り方を構想する。  ■ 香川県「独立の父」中野武蔵(R3実践) 郷土の偉人「中野武蔵」のまちづくりについて、先人の思いや願い、計画性といった視点から考察し、政治に関わる人々の思いや願いに共感し、中野武蔵物語で紹介すべき業績を選択・判断する。	● 赤4組 玉藻公園の魅力をPRするプロジェクト  もっと地元の人に愛される玉藻公園にするために、玉藻公園の魅力をPRします。 ● 白5組 さぬきに光をともし隊 さぬき提灯を活用し地域活性化プロジェクト
第5学年	わたしたちの生活と政治		
第6学年	わたしたちのくらしと日本国憲法 国の政治のしくみと選挙 ↓ 日本の歴史 ↓ 世界の中の日本 ■ 世界の未来と日本の役割	■ 国の政治のしくみと選挙	さぬき提灯を広めるために活動している香川大学の学生サークルTERASUと協同でさぬき提灯を作成しました。
中学校社会科へつなぐ			

□内容Ⅲ 「くらしと健康・安全」…私たちの「いのち」と「くらし」を守るために
～住みよいくらし(健康・安全)づくりに参画できる人づくり～

	社会科 くらしと健康・安全	主権者としての資質・能力へつなぐ	縦割り活動とのつながり
第3学年	くらしを守る ■ 火事からくらしを守る ■ 事故や事件からくらしを守る	■ 地域の安全を守る(消防) 火事が発生した際の関係機関の対処の様子を捉え、今後火事による被害を減らすために有効な取り組みはどれか、今後の市の取り組みや自分たちが考えたアイデアから選択・判断する。(R3 実践)	● 白2組(R2)いのちをまもるくん 自分たちのいのちを守るためにできることを考え、実行するプロジェクト  学校防災アドバイザーや防災士の方と一緒に、学校の避難訓練を改善し、実行しました。
第4学年	住みよいくらしをつくる ■ 水はどこから ■ ごみのしよりと利用	■ わたしたちのくらしを支える事業(水) 下水処理場の季節別運転管理による下水の流出調整の在り方に関して、選択・判断する活動を通して、上下水道事業は人々の生活環境や自然環境の持続的な維持向上役立っていることを理解する。(R4 実践) ■ わたしたちのくらしを支える事業(水) 栂川ダム建設の価値を選択・判断する活動を通して、公共事業の意味、公共事業は計画的に行われていることを理解する。(R3実践) ■ 自然災害からくらしを守る 香川県の風水害の事例から、人々を守る関係機関の働きを捉え、災害時に自分たちがとるべき行動を選択・判断する。(R1 実践)	▲ はっけん アブラカタブラ 使用済みの食用油のリサイクル活動を通じて、汚水の環境への負荷を実感したり、水屋資源の再利用の大切さに気づく。  ● 赤4組 スポごみで地球を笑顔にごみひろいをスポーツとして取り組むスポごみを広げる活動を通じて、地域や瀬戸内海の自然環境に親しみ、環境問題の解決に取り組むプロジェクト。 
第5学年	わたしたちの生活と環境 ■ 自然災害を防ぐ ■ 環境を守るわたしたち	 災害行動メモ「みまも～る」をよりよいものにするため、どんな内容を追加すべきか話し合った。 ■ 環境を守るわたしたち(R4実践) 瀬戸内海の環境を保全するための有効な取り組みはどれか、今後の市や県の取り組み等も考慮し、自分たちが考えたアイデアから選択・判断する。	● 白1組 五色台白1ワールド 五色台の自然環境を様々な体験を通して学び、五色台の活用方法を提案する。  五色台を訪れ、自然を体感するアクティビティを通して、自然の魅力を肌で感じました。
第6学年	わたしたちの生活と政治 ■ 子育て支援の願いを実現する政治／震災復興の願いを実現する政治 世界のなかの日本 ■ 世界の未来と日本の役割	■ わたしたちのくらしと政治(震災復興の願いを実現する政治)	
中学校社会科へつなぐ			

3年 単元名「わたしたちのまち みんなのまち」（全16時間）

段 階	時	学 習 活 動
I 「学習問題 の設定、学 習への見通 し」	① ② ③ ④ ⑤	○身近な地域を見学したり、高松市の地図を概観したりして、高松市について調べる学習問題と学習計画をつくる。 ・身近な地域について話し合い、学校のまわりの調査計画をたてる。 ・学校のまわりを見学する。 ・学校のまわりのようすを地図にまとめる。 ・学校のまわり以外の高松市の地域について話し合う。 ・高松市について調べる学習問題をつくる。 【学習問題】 高松市は、どのようなようすなのだろう？見学やインタビューをして、地図にまとめ、高松市のようすを伝えよう。
II 「現状の理 解、問題点 の把握」	⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩	○高松市のようすを5つの視点から調べ、地図にまとめる。 ・高松市の地形のようすについて調べ、地図にまとめる。 ・高松市の土地利用のようすについて調べ、地図にまとめる。 ・高松市の交通のようすについて、地形や土地利用との関連を考えながら調べ、地図にまとめる。 ・高松市の古くから残るものについて調べ、地図にまとめる。 ・高松市に公共施設について、交通や土地利用との関連を考えながら調べ、地図にまとめる。また、高松市役所の方から、市役所の働きについて、教えてもらう。
III 「深まった 課題の設 定」	⑪	○高松市役所の方から、高松市のよさが伝わるサイクリングコースを考える依頼をもらい、深まった課題を設定する。 【深まった課題】 観光交流課の齋藤さんから「高松市のよさが伝わるサイクリングコースを考えてほしい。」と依頼がきたよ。高松市のよさが伝わるサイクリングコースを考えて、提案しよう。
IV 「多角的に 考察、選択・ 判断」	⑫ ⑬ ⑭ (本 時)	○サイクリングコースをつくるために、調べ活動を行い、高松市のよさが伝わるサイクリングコースを話し合う。 ・サイクリングコースの目的地を3つ絞り、自分の考えをもつ。 ・グループで1つのサイクリングコースを作る。 ・よりよいサイクリングコースになるように、地形、土地利用、交通、公共施設、古くから残るものの視点を生かしながら、全体で話し合う。
V 「自分なり の最適解の 表出」	⑮ ⑯	○高松市のようすの学習やサイクリングコースの提案を通して分かったこと、考えたことを、サイクリングコースの提案書にまとめるとともに、高松市のよさとは何かを考え提案書につけ足す。

本時の学習指導

(1) 目標

- サイクリングコースを時間的、空間的、関係的な視点で再構成することを通して、高松市のよさを捉え直し、自他の考えを比較・関連付け・総合しながら、高松市のよさがさらに伝わるコースを創造することができる。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	問題を解決していく過程	教師の指導と評価
【単元の課題】 学校のまわりをお家の人に伝えたら、喜んでくれたね。高松市のようすも調べて地図にまよめたいな！高松市ってどんな市なのだろう？高松市のようすを、見学やインタビューをして、地図にまよめ、高松市を訪れる観光客に高松市のことを紹介しよう。 観光交流課の齋藤さんから、サイクリングコース提案の依頼が来たよ、ガイドマップを生かして、実際にサイクリングをする観光客に「高松市のよさ」が伝わるコースを考えよう。		○ 主体的に問題解決に向かうことができるよう、第1次から単元の問いと見通しを設定し、子どもの文脈と学習内容をストーリー化しながら、新たな問いを設定する。
1 本時のめあてを確認する。	「高松市のよさ」が伝わるサイクリングコースを完成させよう。	○ 議論の方向性が定まるように、コースを考える条件を事前に設定しておき、本時の始めでも「よさ」が伝わるという目的と条件を確認する。
2 グループごとに意見を交流する。	他のグループは、どんなコースを考えたのか知りたいな。	○ 個の意見のこだわりが表出するように、グループでダンボードを用意し、自分で集めた資料を貼り、使えるようにしておく。
3 全体で交流し、高松市のよさが伝わるようにするにはどうしたらいいか吟味する。	各グループのコースをくらべてみよう。 2つのコースのよさは何かな？ 全体を回るコースもいいけど、歴史をしっかり学べるコースもいいね。人によって選べるのもいいね。 屋島は、自然も感じられるし、歴史も学べる場所だから、高松のよさがよく伝わる場所だと思うよ。 高松市の「よさ」が伝わるサイクリングコースを考えることができたね。 【質的転換を生む発問】 齋藤さんは驚いてくれるかな？ うーん。何かが足りないような。このままでは満足してくれないような気がする。 【質的転換を生む支援】 齋藤さんのスライドを振り返る。 高松市には、素敵な自然、大切にしたい歴史、便利なお店や交通がある。そのよさを感じてもらうために、目的地のよさは何なのか。しっかり考えることが大切だ。そして、有名な場所だけでなく、地元の人も知らない新たな高松市のよさを私たちが見い出して、発信できるコースにしたいな。	○ 子どもたちが他のグループと比べる意味を感じ、意欲を高めるため、「なぜ同じ高松市のよさを伝えるコースなのにこんなに違っているのか」を問う。 ○ 社会的事象の見方・考え方が表出するように、教師が用意した資料や地図を用いて、他のグループのコースと比較したり、関連付けたりしながら、考えることができるようにする。
(1) 地図上に全グループの目的地を配置した地図から考える。 (2) 意図的に抽出した2つのグループの地図から考える。		○ 「高松市のようす」が「高松市のよさ」に子どもたちの知が質的に高まるように、コースや目的地を比較し、子どもたちが気づいた高松市のよさやよさを伝えるための方法をまとめ、板書に位置づけていく。
4 自分なりの「高松市のよさが伝わるコース」についてまとめる。		○ 「新たなよさ」のイメージを全員が共有できるように、自分調べで新たなよさに近い体験をしている子どもに語ってもらう。
5 これまでの豊かな自分調べを生かしてグループごとにコースを修正する。	「さぬきのめざめ」っていうアスパラガスは、すごく大きくてビックリしたよ！！Mさん 玉藻城のお堀には、海の魚が泳いでいたよ。水城ならではのおもしろさだね！ 五色台の根来寺の牛鬼像は、インスタスポットとして、アピールできそう！ 農家さんにお願いして、農業体験ができるようにしたらどうかな。 栗林公園を玉藻城に変えたよ。おもしろい発見をしてほしいな。 牛鬼だけではなく、インスタ映えしそうな場所を見つけて提案したいな！	【評】 高松市のようすを生かしたコースづくりから、高松市のよさを生かしたコースに質的に転換しようとする個の見方・考え方の育ちをノート記述や発言から見取り、指導に生かす。
6 まとめを書く。		○ 観光交流課の齋藤さんやサイクリングショップの方に見てもらうことを伝え、さらによりよい提案にしようとする意欲を高める。 ○ よりよいコースを目指す意識を高めるために、目的地を変更したグループや個のまとめを取りあげる。

3年 単元名「火事からくらしを守る」(全8時間)

段 階	時	学 習 活 動
I 「学習問題の設定、学習への見通し」	①	○消防局の方から高松市の火災件数の変遷について聞き、本単元の学習問題を設定し、学習計画を立てる。 【学習問題】 高松市の火災による被害を減らすにはどうすればよいのだろう。実際に起きた工場火災の時の対処や、その後の対応について調べたことをもとに考えて、消防局の方に提案しよう。
II 「現状の理解、問題点の把握」	② ③ ④	○高松市で実際に起きた火災の対処の様子を調べ、時系列表や関係図にまとめる。 ・火災発生から消火までの対処の様子を調べる。 ・関係機関の協力体制を調べ、関係図にまとめる。 ・高松市の消防施設の配置や数を調べ、地図にまとめる。
III 「深まった課題の設定」	⑤	○火災の被害を減らすために、改善できそうなところがないか話し合い、深まった課題をつくる。 【深まった課題】 火災の被害を減らすために、これから取り組んでいくべきことは何だろう。今ある課題を踏まえて、どんな取り組みを行うべきかを考え、消防局の人に提案しよう。
IV 「多角的に考察、選択・判断」	⑥ ⑦ (本時)	○高松市の火災を減らすための取り組みを考え、消防局の人に提案する内容を話し合う。 ・他地域の取り組みを参考にして、高松市の火災被害を減らす取り組みを考える。 ・考えた取り組みの中から、消防局の方に提案する取り組みについて話し合い、全体で選択・判断する。
V 「自分なりの最適解の表出」	⑧	○話し合ったことをもとに、自分の考えを意見文に書き、消防局の方に発信する。

本時の学習指導

(1) 目標

高松市の火災被害を減らすために特に大切な取り組みについて、互いの考えを比較しながら話し合うことを通して、消防局に提案する取り組みの優先順位を決めることができる。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	問題を解決していく過程	教師の指導と評価
【単元の課題】 高松市の火災による被害を減らすにはどうすればよいのだろう。実際に起きた工場火災の時の対処や、その後の対応について調べたことをもとに考えて、消防局の方に提案しよう。		○ 単元の課題や、これまで調べてきたことを振り返ることができるように、掲示しておく。
1 前時の振り返りをする。	工場火災の様子や消防署の人の話から、課題が見えてきたね。 ・火災警報器の設置率 ・通報や避難の遅れ ・同時火災に対する対処 ・高齢者の逃げ遅れ	○ 工場火災の時の課題が分かる図を掲示しておくことで、本時の課題を意識付けられるようにする。
2 本時の課題を確認する。	高松市の火災の被害を減らすためには、どの取り組みを特に優先して行うべきだろう。	○ 消防署の方の言葉を掲示しておくことで、そこから学んだことをもとに根拠を述べられるようにする。
3 これから高松市が優先的に取り組むべきことについて話し合う。	4つの課題を解決するために、6つの取り組みにしばっていたね。この中の、どれを特に優先的にやっていくべきか考えよう。 ・消防車の数を増やす ・火災警報器の設置を呼びかけるポスターを配る ・防災訓練でクイズを出して、楽しく対処法を学べるようにする ・火災が広がりやすい住宅街に、消火器を配る ・高松市の「防災の日」を決め、その日に防災イベントを開く ・幼稚園に訓練の参加を呼びかけ、防火体験活動を行う	○ 事前に一人一人の考えを一覧にして配布しておくことで、互いの考えを把握した上で話し合いを始められるようにする。
(1) 考えを詳しく聞いてみたい友達と、意見を伝え合う。	火災報知器の設置を呼びかければ、火災に早く気付くことができ、逃げ遅れが減ると思うよ。被害も抑えられる。 クイズのように楽しみながら知れたら、お年寄りから子どもまで幅広く、正しい対処方法を学べると思うよ。 高松市の消防車の数を、もっと増やすことができれば、同時火災にも対応できるし、早く消火することもできるよ。 高齢者の方にも防災イベントに来てもらえれば、逃げ遅れが減るはずだ。体の不自由な人にも知らせたいね。	○ 掲示を活用しながら説明している児童を称賛することで、調べを根拠に述べられるようにする。
(2) どの取り組みを優先すべきかを全体で話し合う。	ポスターで呼びかける方法もあるけど、防災訓練などで直接呼びかける方法もある。どっちが効果的な。 消防職員や消防車の数は限られているんだから、私たちが正しく対処できれば、消防の人も安心できるね。 高松市には高所カメラがあるから、その情報で消防車をより効率的に現場に向かわせることができるよ。 もし火災が起きても、その前にちゃんと備えて準備しておけば、高齢者でも逃げ遅れは防げそうだね。	○ 個々の考えをあらかじめ教師が見取っておくことで、話し合いの流れに応じて意図的に指名するなど、議論を活発にするための支援に生かせるようにする。
4 本時のまとめをする。	話し合っていると、地域の人々が火災に対して正しく対処することや、素早く行動することにつながる取り組みが上位に上がってきたね。消防と同じぐらい、地域の人々の取り組みが必要なんだ。	○ 火災の被害を減らすための方法について、それぞれの意見を比較して話し合うことを通して、自分の考えを広げたり深めたりしているかを、評価指標をもとに評価する。
5 最終的な自分の考えを書く。	取り組みの優先順位を決められたね。自分たちが納得できる提案になりそうだ。高松市の火災の被害を減らすためには、消防署や消防団の取り組みも大切だけど、ぼくたちのような地域の人々が、火災の被害を減らすために協力していくことも大切だね。 ぼくは、自分たちが火災への対処について知ることが被害を減らす近道だと思ったよ。 わたしは、一人一人が身近な人に正しい対処を教えれば、被害を少なくできると思ったよ。 高松市では消防がいろいろな人と協力しているから、ぼくたちも協力しないと！	○ それぞれの取り組みをカードにしておくことで、黒板上で並び替えながら考えられるようにする。
		○ 取り組みの共通点を問いつけることで、最適解につながる要素に気付くことができるようにする。
		○ 消防局の方の顔写真を掲示しておくことで、自分たちの考えを提案するという次時の見通しをもつことができるようにする。

3年 単元名「事故から地域の安全を守る」(全7時間)

段 階	時	学 習 活 動
I 「学 習 問 題の設定、 学 習 へ の 見 通 し」	① ②	○身のまわりの危険箇所等の話し合いや、高松市の交通事故数のグラフを手がかりに、学習問題を共有し、学習計画を立てる。 ・身のまわりの危険箇所等について話し合い、学習問題への見通しをもつ。 ・高松市の交通事故における課題を把握し、課題を解決するための学習問題をつくり、調べる計画を立てる。 【学習問題】 わたしたちの身のまわりでは、だれがどのようにしてまちを守っているのだろう。
II 「現 状 の 理解、問題 点の把握」	③ ④	○教科書資料や、警察署発行の広報誌、県警本部等の見学を通して、交通事故が起きた時の人々の働きについて調べ、表にまとめる。 ・教科書や副読本を活用して事故発生時の対応について概観するとともに、県警本部にある通信司令室の見学を行う。 ・調べて分かったことや、見学を通して分かったことをもとに、警察の仕事についてノートにまとめる。
III 「深 ま っ た 課 題 の 設定」	⑤	○まちの安全を守るために、地域の人々がどのように取り組んでいるか調べる。 【深まった課題】 まちの安全を守るために、わたしたちを含め地域の人間がどのようなことに取り組めばよいのか、警察の人にどのようなことを要望していくことが必要なのかを考えよう。
IV 「多 角 的 に 考 察、選 択・判断」	⑥	○まちの安全を守るために、警察と地域の人々はどのように関わっていけばよいのか話し合う。
V 「自 分 な り の 最 適 解の表出」	⑦	○高松市の交通に関わる課題を解決し、まちの安全を守るために、自分たちにできることは何か考え、ノートにまとめる。

3 年 単元名「農家の仕事～まるまる農園の未来をえがこう～」(全 12 時間)

段 階	時	学 習 活 動
I 「学習問題 の設定、学 習への見通 し」	① ② ③	○ ブロッコリー農家の仕事について調べる単元の学習問題をつくり、学習計画を立てる。 ・高松市でたくさん作られている農産物について調べ、香川県のブロッコリー生産量が全国で3位であることを知る。 ・高松産のブロッコリーの試食やブロッコリーの栽培活動を通して考えた調べたいことや疑問について話し合う。 ・高松市のブロッコリー農家について調べる学習問題をつくる。 【学習問題】 農家の人は、おいしいブロッコリーをたくさんつくるために、どのような工夫をしているのだろう。
II 「現状の理 解、問題点 の把握」	④ ⑤ ⑥ ⑦	○ ブロッコリー農家大東さんの「まんまる農場」を見学し、ブロッコリーの育て方をカレンダーにまとめる。 ・まるまる農園を見学し、ブロッコリー栽培の方法を調べる。 ・調べたことをカレンダーにまとめる。 ・ブロッコリーづくりの工夫を見つけ、工夫カードにまとめる。 ・ブロッコリーづくりの工夫をカレンダーに貼る。
III 「深まった 課 題 の 設 定」	⑧	○ 大東さんの悩みを知り、深まった課題を設定する。 ・気候や自然災害によって収穫が不安定なときがあること、他地域の生産量が増え、価格が下がっていること、そして大東さん自身もこれから農家としてつづけていくために悩んでいることを知る。 【深まった課題】 大東さんが、これからも農家を続けていくためには、どうすればいいのだろう。
IV 「多角的に 考察、選択・ 判断」	⑨ ⑩ (本 時)	○ これからのまるまる農園の在り方を考え、地域の人と共に議論する。 ・他県の生産量が増えていることを知り、どうすればこれからも農家として続けられるか考えたり、調べたりして自分の考えをもつ。 ・これからのまるまる農園の在り方を、地域の人と共に話し合う。 ブロッコリーから他の作物への転換 ブロッコリーの品質の向上 販路の拡大など
V 「自分なり の最適解の 表出」	⑪ ⑫	○ブロッコリー農家の学習を通して分かったこと、考えたことをまとめるとともに、これからの農家さんにとって大切なことは何か自分なりに考え、大東さんに提案する。

3 本時の学習指導

(1) 目標

- ・ ブロッコリー農家がこれからも農業を続けるために必要な取り組みを考えることを通して、つくる人(生産者)、食べる人(消費者)、つなぐ人(JA・行政・小売店)の立場の人々の協力が、持続可能な農業に欠かせないことを理解する。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	問題を解決していく過程	教師の指導と評価
【単元の課題】 日本一小さい県なのに生産量が第3位！ブロッコリー農家の人は、おいしいブロッコリーをたくさんつくるために、どのような工夫をしているのだろう。		○ これまでの単元の流れや、単元のゴールを確認し本時への意欲や課題意識を高める。
1 前時までの活動を振り返り、本時の活動の見通しをもつ。	ブロッコリー栽培をやめている農家も出てきていて、ブロッコリーの畑も減っているよ。	○ ブロッコリー農家が抱える課題に着目できるように、ブロッコリーの販売価格の推移や冷害の際の販売価格の低下に関する資料を掲示しておく。 ○ 各グループが根拠をもって相手を説得することができるよう、これまでの学習で活用した資料を掲示したり、配布したりして、発表で使用するよう促す。 ○ それぞれの取り組みのメリットやデメリットを整理し、比較することができるように板書で表にまとめていく。 ○ 時間軸を広げ、今だけではなく未来のことを考えた取り組みの大切さに気付くことができるよう、大東さんにキウイ栽培の可能性と難しさについて教えてもらう。
2 本時の課題を確認する。	これまで、天気によって収入が不安定な時があったよ。 大東さんは、ブロッコリーを続けるか、違う作物に変えるか悩んでいるよ。 他のブロッコリー農家も同じように悩んでいるそうだよ。	
3 瀬戸内の住民に伝えるべき内容を選択・判断する。	まるまる農園が、これからも農家として続けていくためには、どうすればいいのだろう。	
(1) 各グループ案を発表する。	わたしは、ブロッコリー以外の野菜や果物に変えていくべきだと思うよ。 僕は、収穫が安定しない冬の時期は、新しい作物を育てるべきだと思う。 ぼくは、香川県のブロッコリー農家としてブロッコリーを続けていくべきだと思う。	
(2) 交流の中で、それぞれの取り組みのメリットやデメリットについて話し合う。	珍しい品種の野菜や果物は、少なくとも高く買ってくれるよ。 高松ごじまん品のナバナや、さぬきっかが時期的にぴったりだと思う。 ハウス栽培や高級品種の栽培など、栽培方法を工夫すると安定するよ。	
(3) 大東さんの意見を聞く。	大東さん：多品種を育てることについて	
4 農業を続けていくために、大切な考え方は何か考える。	大東さんはキウイも育てているけど、収穫できるまで5年はかかったそうだよ。 ブロッコリーの収穫時期に、他の作物を育てるのは作業が大変で、難しいのだね。 ハウスは、難しいけど、高級品種のアイデアは大東さんもいいねと言ってくれたね。	○ 限られた人員や時間について気付くことができるように、まるまる農園で働く人数について子どもたちに問いかける。 ○ 農家の仕事の難しさや苦労にも気付くことができるよう、子どもたちのアイデアには、大東さんから率直に意見を伝えてもらう。例えば、ハウス栽培など、コストやリスクに関して実現が難しいことを話していた。
	大東さん：ブロッコリーの栽培方法の工夫について	
	農家を続けるために、大切なことは何だろう。	
6 本時の振り返りと次時の見通しを確認する。	気候の変化、人気の作物など、今のことだけではなく、未来のことも考えて、作物を育てたりすることが大切だね。 畑の広さは限られている。高く売れるようにしたり、無駄がないように作物をつくったりすることが大切だ。 まるまる農園は、大東さんと奥さんの2人しかいない。2人でもできることを考えなければいけないね。	評 自分のグループのアイディアを他のグループと比較したり、地域の方からの意見を関連づけたりしながら、農家の人が農業を続けるために大切なことは何かを見出す姿を4観点の評価指標から見取り、支援に生かす。
	今のことだけではなく、未来を考えながら、限られた畑や限られた人数の中で、少しでも高い作物を選び、これからも作り続けることが大切だね。	

4年 単元名「水はどこから」(全11時間)

段 階	時	学 習 活 動
I 「学習問題の設定、学習への見通し」	① ② ③	○水について話し合い、本単元の学習問題、学習課題を設定する。 ・水はどこから来ているのか、知っていることを話し合う。 ・学校の蛇口の水はどこから来るのか、校内を調べたことをもとに、話し合う。 ・水はどこから来ているのか予想するとともに、単元の学習問題を設定し、実際に調べるための計画を立てる。 【学習問題】 蛇口の水はどこからどのどのようにして送られてくるのか調べ、今後、私たちはどのように水と関わっていくべきか考えよう。
II 「現状の理解、問題点の把握」	④ ⑤ ⑥ ⑦	○飲料水がどのように学校まで届くのかについて調べ、その役割について考える。 ・飲料水の事業について、資料等で調べ、まとめる。 ・浄水場で水をきれいにする仕組みについて調べ、まとめる。 ・香川用水や宝山湖等、県の水の流れについて調べまとめる。 ・高知県の早明浦ダムや徳島県の池田ダム等、県外からの水の流れについて調べ、県内の流れと合わせ、飲料水の水の流れについてまとめる。
III 「深まった課題の設定」	⑧	○県下最大の栂川ダムが整備されていることを知り、その概要について調べ、深まった課題をつくる。 【深まった課題】 香川県は、近年水不足になっていないのに、なぜ県下最大の栂川ダムをつくっているのだろう。
IV 「多角的に考察、選択・判断」	⑨ ⑩ (本時)	○栂川ダムをつくる理由について調べを行い、栂川ダムが果たす役割について話し合う。 ・なぜ、近年水不足になっていないのに栂川ダムをつくっているのか、その理由について調べ、自分の考えをもつ。 ・栂川ダムをつくる意味について話し合う。
V 「自分なりの最適解の表出」	⑪	○水の学習を通して分かったこと、考えたことをまとめるとともに、未来の香川県にとって大切なことは何か考え、ノートにまとめる。

本時の学習指導

(1) 目標

- なぜ、栂川ダムが今造られているのか、社会的事象の見方・考え方で捉え、これまでの事業と比較したり関連・総合したりすることで、ダム建設の意味を理解することができる。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	問題を解決していく過程	教師の指導と評価
【単元の学習問題】 蛇口の水はどこからどのどのようにして送られてくるのか調べ、今後、私たちはどのように水と関わっていくべきか考えよう。		
1 前時までの活動を振り返る。	私たちは、山から来た水を浄水場できれいにすることで、いつでもきれいな水を、安心して使うことができるよ。 香川県は、香川用水を整備するだけでなく、香川用水調整池を作ることで、水不足で困ることを防いでいるよ。	- これまでの学びを振り返り、単元の課題を共有し、現時点での自分の考えを整理しておく。 - 単元の問い、本時の問いをつないで考える。 - 前時までに本時の問いを共有しておく。 - 教師は、子どもたちの考えを見取り、本時で育みたい見方・考え方がどれだけ獲得できているか整理しておく。 - 子どもたちは、自己の考えだけでなく、友達の考えを共有できるように PC 端末上に考えを記録しておく。全員がいつでも確認できるようにしておく。 - 栂川ダムの資料については子どもが集めるだけでなく、教師が用意し、子どもたちの端末に配布しておき学びを深めることができるようにしておく。 - 自分の考えを整理し、友達に伝え、全体共有し、最後自分に返ることができるように考えをつなげること、つないだ考えの根拠を問うことができるように個別に支援する。
2 本時の学習課題を確認する。	ここ数十年、水不足や生活に困ることはなくなったのに、なぜ、新しく栂川ダムを造っているのだろうか。	
3 自分の考えを整理する。	ダムをつくるのに 20 年かかるよ。今後の水不足が予測されるのかな。 香川用水に頼っているばかりでなく、自分たちで水を確保するためには必要だ。 ダムの働きには、災害対策もあるよ。これからもきれいな水を使い続けるためかな。 友達の意見と比べたりつないだりしながら、栂川ダムが造られた意味を考えていこう。	
4 クラス全体で栂川ダムが造られている意味について話し合う。	時間の視点で見ると、一番水不足になった時に計画され、準備されてきたんだね。 香川県で使う水の半分は他県からもらっているよ。これを改善するためだ。 最近では、災害も増えているよ。災害対策は香川用水でも同じ考え方だったね。 栂川ダムが今、造られている理由を整理してみよう。 過去の反省やこれからのことを考えるとやはり今造っておくことが大切だ。 自分の命は自分で守るという考え方とつながるよ。自己水源とはそういう意味か。 想定外のことが起きても大丈夫なように、いろいろな想定をしているんだね。 栂川ダムが今、造られている理由が分かったよ。 私たちの飲料水は、様々な機関の人が連携し、過去の経験や課題を克服し安全で安定的かつ計画的に供給されているよ。 飲料水の事業は、今だけでなく、未来を見据えて、活動しているよ。 今、できることをしておかないと、未来は、大変なことになるね。 私たちが、今すべきことをしっかりとしていかなければいけないね。	
5 本時を振り返り、次時の課題を確認する。	これまでの学びを通して、新しいダムは必要だと思う。 やはり、これから考えると必要だ。 みんなの話を聞くと、判断に迷うな。 必要だけど、使い方を考えないといいないな。	